令和元年度　日立市教育研究会先進校等調査派遣研修報告書

日立市立多賀中学校　教諭　増子　拓美

1　派遣期日　　令和元年６月２７日（木）

2　研 修 先　　学校名　茨城大学教育学部附属中学校
所在地　茨城県水戸市文京１丁目３番３２号
http://www.jsch.ibaraki.ac.jp/

3　研修内容　　社会を創る自立した生徒の育成
～授業づくりの実践および教育課程の工夫・改善を通して～

⑴　公開授業

①　がんの予防　～がんのリスクを軽減させる対処法を思考する～
（茨城大学教育学部附属中学校　佐藤　道子先生）

異常な細胞であるがん細胞が増殖する疾病であるという発生の仕組み，その要因には不適切な生活習慣を始め，様々なリスクが関わり合っている傾向を理解するために，ジグソー活動を取り入れた学習。

②　バスケットボール　～思考力・判断力・表現力等を育む学びの提案～
（茨城大学教育学部附属中学校　矢吹　幸徳先生）

男女共習の授業の中で，セルフワーク（ドリル的な要素）やチームワーク（タスク的な要素）から，自分の役割やチームの特徴を把握して，作戦ボードを活用しながらチームに合った課題を見いだすことを目指した学習。

③　大学教員との授業づくり　～賢い身体を育む「体つくり運動」～
（茨城大学　篠田　明音先生）

体育という教科の中で，「何が今の子どもたちには必要なのか」を考え，生徒自身が課

題を解決するために様々な情報を自分の身体に結びつける『実践知』を育むことを目指した授業内容の提案。

4　感想

○　佐藤道子先生によるがん教育の授業では，可視化できるがんモデルを用いてがん細胞の発生・増殖の仕組みについて理解した上で，ジグソー活動を取り入れ，生徒が主体的に活動する場が設定されていた。また，ジグソー活動をする中で得た情報を生かして，①個人としてできること②自治体として対策できることの２つの視点から，がんにかかるリスクを軽減する方法を学ぶことができていた。可視化できるがんモデルで生徒の興味・関心を引き出し，自治体側の視点に立ち議案書作成を行うことで地図帳などを用いる生徒の姿も見られ教科横断的な学習にも繋がっていた。興味関心を引く導入，課題を身近に感じることができる発問・問題提起など，大変興味深い内容だった。

○　矢吹幸徳先生によるバスケットボールの授業では，セルフワーク（個人）→チームワーク（グループ）→ゲームワーク（学級）と段階によって学習形態を変化させながら男女共習で授業が展開されていた。また，ＩＣＴを活用し，自分やチームの動きを映像で振り返るなど，課題を明確にして次の学習に進める環境が整っていた。セルフワークの時間で基礎的な練習を重ねることで個人の運動量を確保し，チームワークの時間でボールと人が動いている状況で最善の選択ができるような判断力を磨き，ゲームワークの時間で実践するという授業の流れが生徒自身にも身に付いているため，授業がスムーズに展開されていた。毎時間同じことを行うセルフワークの際には，作業感を出さないように音楽を流して行うなど，小さな所にも工夫がされていて，自分自身も取り入れてみようという内容だった。

○　茨城大学篠田明音先生による体つくり運動の授業は，以前に比べて外で遊ぶことが少なくなった子どもたちにとって体を思い通りに動かすことが非常に難しくなっているとの問題提起からスタートした。体つくり運動を通して，体を動かすことの楽しさを知ることや自分の体について知ることが大切だと講義を受け，大学生も交えて授業が行われた。リズムに合わせて体を動かしたり，自分以外の人と協力しながら体を操作したりする内容が紹介され，中学生の授業でも取り入れてみたいと思うようなことを学ぶことができた。

○　今回の茨城大学教育学部附属中学校での研修を経て，自分自身もまだまだ勉強不足だということを実感した。生徒が「できた・楽しい」と思えるような実践的な手法を知ることができ，実り多き研修になった。今回の研修で得た刺激を２学期以降の授業に還元し，今後も授業力向上のために研修を重ねていきたい。